

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 16 日現在

機関番号：15301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820029

研究課題名(和文) 通文化的語用論におけるリスナーシップの研究

研究課題名(英文) A study of listenership in intercultural pragmatics

研究代表者

難波 彩子 (Namba, Ayako)

岡山大学・その他部局等・准教授

研究者番号：00638760

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は通文化的語用論の視点に立ち、(非)言語を含めたリスナーシップ行動が、どのように会話参加者の持つ社会的な役割と関係し、アイデンティティの構築に役割を果たすのかについて明らかにすることである。具体的には、新たに家族会話データ(9家族による食卓の会話)を収集し、リスナーシップと家族メンバーの社会的な役割の関連性を提示した。また、既存の会話データ(23組の女性ペアの会話)より、リスナーシップと相互行為機能のつながりについて、ミクロとマクロな視点から明らかにした。さらに、日本の大学の英語教育に対するリスナーシップ研究の応用についても検討した。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study are to explore how listenership, including (non-)verbal behaviors, relate to the social role of participants who join the Japanese ongoing interaction, and how it contributes to constructing their identities, drawing on intercultural pragmatics.

In order to achieve these purposes, the study first collected 9 families' conversations and showed a relationship between listenership behaviors and the social roles of different family members. It also clarified a connection between the listenership behaviors and interactional functions covering from those micro and macro perspectives by analyzing another set of existing video-recorded data which covered 23 female dyads conversations. The present study analyzed and used this data to explore how to incorporate listenership findings into English language classes in Japanese universities.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：リスナーシップ 通文化的語用論 日本語インタラクション 社会言語学 アイデンティティの構築

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 16 日現在

1. 研究開始当初の背景

聞き手行動と笑いにおけるそれぞれの先行研究の貢献が存在する中で、聞き手行動と笑いの関連性を詳細に扱った研究（特に日本語談話研究）はまだほとんどなされていない。このことを踏まえ、Namba (2011) はリスナーシップ（会話の相互構築に向けた聞き手の貢献）について、「びっくりしたこと」について話をするセッティングの会話で起こる、リスナーシップに関わる笑いの機能、談話構造、パワーとソリダリティなどの社会構造について明らかにし、人間関係が会話コンテキストと参加者のやりとりの中で創造され、発展され、調整される会話の柔軟な様子を提示した。この研究成果に従って、特定の会話セッティングの枠を超えた自然な日常会話の中で、笑いや他の言語・非言語現象を含めたリスナーシップ行動の詳細、リスナーシップと会話スタイル、社会的役割、アイデンティティなどについて、さらなる研究が必要とされる。また、英語教育への応用では、学習者のスピーキング活動の動き付けとしてのリスナーシップの役割を調査した (Namba et al., 2011)。将来、国際社会で活躍できるように「英語を使える日本人」の育成を目指すためには、「対話力」と「生きる力」を養う必要がある。この育成に向け、リスナーシップの育成は普段の母国語会話の中で育まれる必要がある。リスナーシップが日本人母語話者に関わる社会規範・社会的役割やアイデンティティとどのように関わり、どのように実際のやりとりを通して育まれていくのかについて、その詳細を自然談話から観察することによって、英語教育と国際社会における日本人の人材育成に役立てていくことが求められる。さらに、リスナーシップにおける通文化的語用論の研究は本研究が初めて試みるものである。会話の原点と思われる「家族」のやりと

りの中で、リスナーシップと家族の役割と絆、そして日本人の自己認識の確立、社会規範とのつながりについて、言語・非言語現象の共起を扱う実証研究は国内・国際的にみてもまだあまりなされていない。また、本研究は教育と人材育成の発展にもつながり、国際社会での日本の発展に貢献することが期待される研究テーマであると確信している。

2. 研究の目的

本研究の目的は談話分析の枠組みを用いて、会話の中で会話の相互構築や「場」の構築に向けて言語・非言語を含めたリスナーシップ行動が会話参加者の持つ社会的な役割、アイデンティティの構築にどのように役割を果たすのかについて明らかにすることである。具体的には、自然談話のデータ収集（家族会話）を行うことによって、(1) リスナーシップと会話参加者の社会的な役割との関連性、(2) リスナーシップとその役割を通して、会話参加者のアイデンティティの構築がなされる過程、(3) リスナーシップと日本語の会話スタイル、日本文化や慣習とのつながりについて明らかにすることを目的とする。共時的・通時的な視点を踏まえた、通文化的語用論におけるダイナミックなリスナーシップの役割を明らかにすることを目指す。

3. 研究方法

(1) 研究計画：自然会話のデータ収集と書き起こしを 1 年目に行い、1 年目後半以降、分析と考察を進める。2 年目以降、前半は研究成果を学会などで口頭発表を行い、後半はその発表をもとにして論文にまとめる。

(2) 方法：談話分析の手法を用いて自己認識の確認の原点となる家族の自然会話データを収集する。その会話を書き起こすことによって、会話参加者が示すリスナーシップ行動を

観察し、言語・非言語現象の談話機能や構造、インタラクション機能を特定する。さらに、リスナーシップと家族間の役割、家族会話のスタイル、アイデンティティの構築と社会的規範のつながりにについて検討する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究の主な成果は以下4点である。

① 新データ収集

上記の研究目的を達成するために、1年目に3種類のデータ収集(家族の自然会話・インタビュー・アンケート)に焦点を置いて研究実施計画を遂行した。研究計画当初は日本人母語話者からなる5~6家族のデータ収集を予定していたが、最終的には関東・関西・岡山に居住する9家族のデータ収集を完了した。詳細としては、自然会話は各家族に5回食事の会話の録音を要請した。会話の様子を踏まえながら、その後フォローアップインタビューを各家族の自宅にて両親または母親に行い、録音会話の内容や普段の家族の様子などについてインタビューした。自然会話やインタビューを踏まえてアンケート調査を行い、家族会話の詳細な情報を得ることが出来た。

② 家族会話におけるリスナーシップの役割について

上記の家族会話のデータを用いて、3種類の会話ジョークを扱いながら、会話ジョークとリスナーシップの関係について明らかにした。分析結果より、話し手の会話ジョークに対して聞き手が積極的に関わることを笑いで示すことで、家族の食卓での会話を円滑に運ばせることに役割を果たしていると同時に、間接的に親が子供に食事を進め際に肯定的に働きかけることが可能となっていることが分かった。こうした働きかけに聞き手側の子供も主体的に応じることで、会話と食を楽しむ様子が垣間みられた。これらの分析

から、家族の食卓の中で会話ジョークに対して笑いで応じることはリスナーシップを高く示し、食卓における円滑な会話の共同構築に重要な役割を果たしていることが分かった。さらに、リスナーシップの役割は、家族メンバーの持つ社会的な役割とも密接につながっていることが観察された(日本英語教育学会第43回年次大会論文集)。

③ リスナーシップ研究の英語教育への応用

日本の大学における英語教育への示唆として、英語授業における日本人学習者の会話ジョークに対する捉え方や会話ジョークを授業で扱う重要性について触れた(日本英語教育学会第43回年次大会論文集・査読あり)。また、リスナーシップが日本人大学生に対する英語教育でどのように応用することが可能であるかについても検討した(日本英語教育学会第42回年次大会論文集・査読あり)。具体的には(1) 談話分析を通して、リスナーシップを英語学習にどのように役立てることができるか、(2) リスナーシップは日本語話者のコミュニケーションスタイルとどのように関連するのか、(3) リスナーシップは、英語で他のクラスメイトとコミュニケーションを図ることに対する学習者の意欲に関してどのように貢献することができるか、以上3点について調査を行った。これらの問いに答えるために、日本人大学生を対象とした英語授業におけるスピーキング活動、特にグループによる英語発表に焦点を置き、談話分析を用いながら上記の点に関して明らかにした。さらに、学習者同士がグループ活動を通して協働しながら学びあう協働学習の意義についても考察した。

④ 既存の女性会話データにおけるリスナーシップと笑いの関係性について

23組の女性会話をデータとして用いなが

ら、リスナーシップとしての笑いが会話参加者同士の共感を築いていく過程に、談話の構造と密接に関連づけられることを提示した

(日本語用論学会第15回大会)。さらに、この研究成果を、リスナーシップとしての笑いについての相互行為的な機能を関連付けて議論した(筑波大学現代語・現代文化フォーラム)。さらに、会話の終結部に特に焦点を置きながら、会話参加者同士の合意形成にリスナーシップとしての笑いが重要な役割を果たしていることについて、会話のミクロな特徴から談話のマクロ構造とポライトネスなど人間関係の構築に関わる社会構造まで多面的に関連付けながら提示した(The 13th International Pragmatics Association Conference)。

⑤ 上記の研究内容についての学会発表と研究論文

女性会話におけるリスナーシップとしての笑いの研究に関わる研究成果としては、日本語用論学会(H24年12月)や筑波大学主催の現代語・現代文化フォーラム(H25年2月招聘講師)にて発表を行った。さらに、これらの研究成果の発展として、談話のミクロとマクロな視点の両方を取り入れたリスナーシップとしての笑いにおける研究発表を最後に行った(H25年9月The 13th International Pragmatics Association Conference)。また、英語教育におけるリスナーシップの研究について研究論文も発表した(H25年3月日本英語教育学会第42回年次大会論文集・査読有り)。一方、新データの家族会話におけるリスナーシップの研究成果としては、会話ジョークにおけるリスナーシップの役割についての研究論文を提示した(H26年3月日本英語教育学会第43回年次大会論文集・査読有り)。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

通文化的語用論におけるリスナーシップの研究は本研究が初めて試みるものである。会話の原点と思われる「家族」のやりとりの中で、リスナーシップと家族の役割と絆、そして日本人の自己認識の確立、社会規範とのつながり、そして会話のミクロからマクロな視点、そして人間関係を扱う社会構造を関連づけたリスナーシップの実証研究は国内・国際的にみてもまだあまりなされていない。また、本研究は教育と人材育成の発展にもつながり、リスナーシップの育成は国際的な人材を育てるためにも有効な視点であると確信している。本研究の意義は、児童・生徒・学生・社会人がリスナーシップを養うことによって世の中のあらゆるコミュニケーションを円滑に促進することが期待されることである。また、国際社会の中で生き抜くことを見据えた「英語を使える日本人」の育成を目指すために、日本人の英語学習者が「自分らしい」自己認識を保ち、さまざまな状況を柔軟に対応ができるようなリスナーシップを兼ね備えたコミュニケーション力を養うことに役立てることも重要な意義として考えられる。さらに、日本人のコミュニケーションのあり方としてリスナーシップを提示することにより、日本社会の規範や文化を尊重し、国際社会に向けて高等機関・企業間における人材育成への取組むことも重要な意義といえる。

(3) 今後の展望

本プロジェクトで得られた家族会話のデータの分析を今後さらに深めることによって、日本人の自己認識の構築とリスナーシップの関係性についてより詳細に提示していくことが必要とされる。家族の会話を通して育まれた自己認識が、学校や職場など、より広い社会

の中でどのように変化していくのだろうか。
そして、日本から海外へとコミュニケーションの場がより複雑な異文化社会に広げられた場合、さらに自己認識の構築過程にどのような変化が起こるのだろうか。このような疑問について、リスナーシップがどのように実際に関わり、日本社会と国際社会の間のコミュニケーションにおける橋渡しとして機能するのかについて、通文化的語用論的な視点にもとづきながら、コミュニケーションや教育と人材育成に貢献できるような見識を提示していくことが今後の展望として求められる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

(1) 難波彩子, 2014, 「日本語の会話ジョークにおけるリスナーシップ」, 日本英語教育学会第 43 回年次研究集会論文集, 早稲田大学情報教育研究所, Vol. 43: 57-62. (査読有り)

(2) 難波彩子, 2013, 「英語学習におけるリスナーシップ」, 日本英語教育学会第 42 回年次研究集会論文集, 早稲田大学情報教育研究所, Vol. 42: 57-62. (査読有り)

[学会発表] (計 7 件)

(1) Ayako Namba, “Listenership in closing in Japanese interaction: The role of laughter towards reaching consensus”, The 13th International Pragmatics Conference, Delhi, India, September 2013.

(2) 難波彩子, 「日本語インタラクションにおけるリスナーシップ - 笑いの貢献 - 」, 第31回現代語・現代文化フォーラム, 筑波大学, 茨城, 2013年2月. (招聘講師)

(3) 難波彩子, 「クロージング場面におけるリスナーシップ: 日本語会話における笑いと共感の関係」, 日本語用論学会第15回大会, 大阪学院大学, 2012年12月.

[その他]

(1) 言語教育センター教員一覧

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/flec/center/staff/ayakonamba/namba.html>

(2) 岡山大学研究者総覧

<http://soran.cc.okayama-u.ac.jp/view?l=ja&u=c487ca97fba4745874506e4da22f6611&f2=30&f1=03&sm=field&sl=en&sp=2>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

難波 彩子 (AYAKO NAMBA)

岡山大学言語教育センター・准教授

研究者番号: 00638760

(2) 研究連携者

原田 康也 (YASUNARI HARADA)

早稲田大学法学学術院・教授

研究者番号: 80189711

(3) 海外研究連携者

Dr. Joseph Gafaranga

Senior Lecturer, Department of Linguistics and

English Languages, School of Philosophy,

Psychology, and Language Sciences, The

University of Edinburgh

Dr. Imelda McDermott

Research Associate, Health Policy, Politics &

Organisation Research Group Institute of

Population Health Centre for Primary Care,

University of Manchester

Dr. Steven McDermott

Research Assistant, Leeds Institute of Health and

Science, University of Leeds